

鳥インフルエンザの侵入防止管理システムに関する研究

1 中核機関・研究総括者

(独) 農業・食品産業技術研究機構 動物衛生研究所 志村 亀夫

2 研究期間

2006～2007 年度 (2 年間)

3 研究目的

近年、世界規模で発生している鳥インフルエンザ(AI)は、発生地における直接被害のほか、発生周辺における養鶏関連品の国際的な流通が停滞する等の影響が出ており、国民への畜産物の安定供給する道を確保しておくことが緊急の課題となっている。一方、国際獣疫事務局(OIE)では一定のバイオセキュリティシステム下におかれ衛生状態が明確に区分されている動物集団について、コンパートメントの概念を適用して衛生状態を仕分けしていく方向性にあるものの、運用のための要件等はまだ示されていない。そこで、コンパートメントの認証に必要なリスク低減措置の要件の検討と運用のためのガイドラインを作成することを本研究の目標とする。

4 研究内容及び実施体制

① 養鶏施設におけるバイオセキュリティシステムの調査・分析 ((独) 動物衛生研究所)

国内外の養鶏施設におけるバイオセキュリティシステムの調査を行い、衛生状態の区分に必要な十分な要件等を整理し、その運用体制の枠組みを検討する。

② 清浄性確認のための検査手法の検討 ((財) 畜産生物科学安定研究所、(独) 畜産草地研究所、三重県科学技術振興センター)

鳥インフルエンザ抗体検出キットの国内外製品について、特異性、感度、簡便性等を従来法である寒天ゲル内沈降反応と比較し、清浄性確認ツールとしての有用性を検討する。また、鶏舎模型および商用鶏舎を用いて鶏舎構造(入換気形式)による病原体の侵入度を評価するとともに、鶏舎構造による舎内での拡散性状を調べることにより、もっとも高率にウイルスを検出できる位置の指針を示す。

③ コンパートメンタリゼーションを適用するためのガイドラインの作成 ((独) 動物衛生研究所)

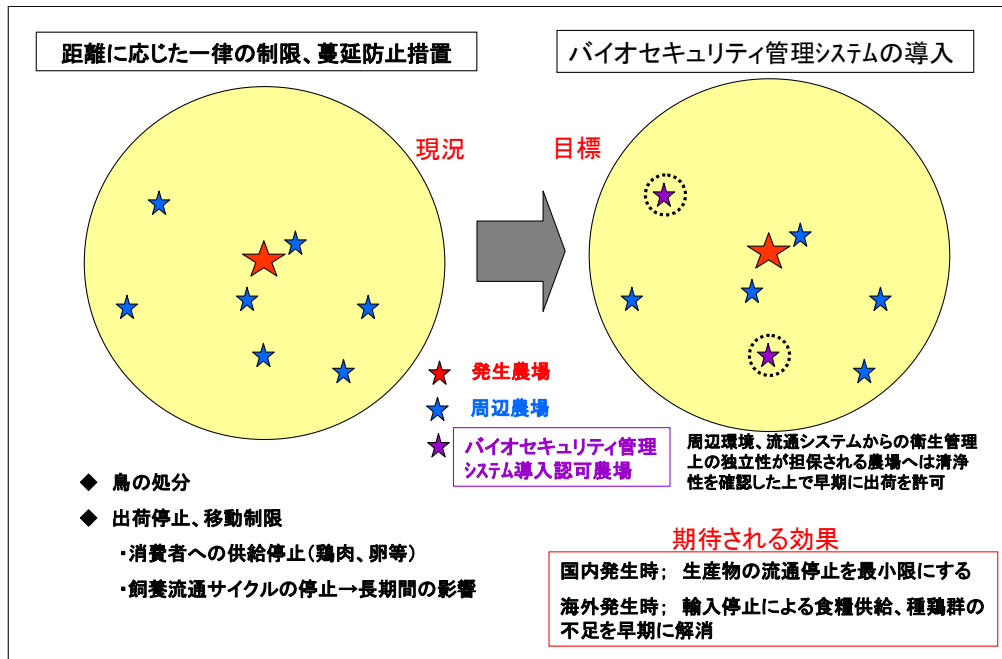
上記の成果を受けて、リスク低減措置の元で出荷の継続を可能にするコンパートメンタリゼーション適用のためのガイドラインの骨子を提案する。

5 目標とする成果

コンパートメントシステム適用のためのガイドラインが作成される。これにより、AI 発生の際にリスク管理状況に応じた発生対応措置をとる選択肢が生まれ、清浄鶏群や生産物の流通を容易にする。また、海外での発生においては、発生に付随する輸入停止措置を縮小し、国内の食料供給や種鶏群の安定確保につなげることが期待される。

鳥インフルエンザの侵入防止管理システムに関する研究

現在の高病原性鳥インフルエンザ(HPAI)発生時の措置と バイオセキュリティシステム導入後の比較



研究内容

